

絶滅危惧種 75 増 1021 種

県レッドリスト 6 年ぶり改訂、復活も

県は、絶滅のおそれがある動植物などを掲載した県レッドリストを 6 年ぶりに改訂した。絶滅危惧種は 75 種増え、1021 種になった。外来種の侵入で在来種が絶滅した一方、絶滅したと考えられていた植物が復活した例があった。

改訂レッドリストに載った主な例	悪化	
	オナモミ	クロサンショウウオ
		
	絶滅危惧Ⅰ類 ↓ 絶滅	要注目 ↓ 準絶滅危惧
理由	外来種の侵入	湿地の乾燥
改善		
	ギンラン	ホンゴウソウ
		
分類	絶滅危惧Ⅱ類 ↓ 準絶滅危惧	絶滅 ↓ 絶滅危惧Ⅰ類
理由	林の手入れで環境改善	再発見

※写真はいずれも県提供

レッドリストは、保護上留意すべき「要注目」から、絶滅のおそれがある「絶滅危惧種」（危険度に応じて 3 段階）、既に絶滅した種までを分類して載せている。前回の 2011 年版と比べ、138 種増の 153 種が載った。

04 年版からいずれも増加傾向にあり、県自然環境課によると、外来種などだけでなく、調査が進んだことで、新たに判明することも要因という。

今回、絶滅に区分されたのは 5 種で、このうち、キク科のオナモミは、1967 年に鹿沼市で見つかったのを最後に 50 年たつており、外来種オオオナモミの侵入により駆逐されたとみて、「絶滅危惧Ⅰ類」から「絶滅」とした。

県内で絶滅したと考えられていた種が発見される例も 5 種あった。ホンゴウソウは 38 年に茂木町で採集されて以来、絶滅したと考えられていたが、2013 年に佐野市で、15 年に茂木町で発見されたため、「絶滅」から「絶滅危惧Ⅰ類」に復活させた。

湿地が乾燥して両生類の生息環境が悪化した例もあった。クロサンショウウオやアズマヒキガエルを挙げ、いずれも「要注目」から「準絶滅危惧」に変更した。

一方、ラン科のギンランは、雑木林を適度に刈り払うことで、林の中に光が差し込み、個体数が増え、「絶滅危惧Ⅱ類」から「準絶滅危惧」に改善された。

県は今回の新たなリストに、生育環境や分布などを詳細に加えた本「レッドデータブック」を 18 年 3 月に発刊する予定だ。